

## 主幹部病変における冠血行再建術：PCI vs CABG

佐賀 俊彦 近畿大学医学部心臓血管外科

冠動脈インターベンション(PCI)の出現以来、心臓外科医は絶えずPCIを意識し、時には怯え、時には過剰に意識し、そして冠動脈バイパス術(CABG)自体の質の向上、発展に大きな努力を払うことでCABGの存在意義を守り高めてきた。加えて、心臓外科医がCABGだけでなく、弁膜症外科や大動脈外科にも関心を向けて、それらを大きく発展させた時期にも符合し、一種のPCI効果ともいえる。その意味ではCABGとPCIは競争的戦友とって良いかもしれない。そのような競合的な緊張関係においても、CABGは、最も予後不良な冠動脈病変である左主幹部(LMT)病変に対して、最も確実に安定した治療効果を提供できる絶対的な選択肢でありえた。

しかし2002年の薬物溶出性ステント(DES)の出現、本邦においては2004年に臨床使用が可能となって以来、事情は大きく変わった。欧米を中心にしてCABG症例が激減し、心臓外科医は存在意義を失う危機さえ感じてパニックに陥った。既にベアメタルステント(BMS)時代においても、PCI選択傾向が著しく高かった本邦においても、年間CABG施行数は2002年以降、連続して減少に転じた。心臓外科医の独壇場であったLMT病変の治療戦略においても、微妙な変化が進行しつつある。

日本胸部外科学会は過去20年にわたり、心臓手術の全国集計を行ってきた。集計は95%を大きく上回る回収率であり、日本における心臓手術をほぼ完全に網羅し、その実情を正確に反映していると思われる。それによれば、年々、手術症例は増加し、2008年では総計で60,000例に近い心大血管手術が行われている。この内の1/3に冠動脈バイパス術(CABG)を主体とした虚血性心疾患に対する手術が行われているが、薬物溶出性ステント(DES)の登場を契機に2002年以降の調査で連続的に漸減傾向を続けていた。2008年の調査では、この漸減傾向に変化がみられて前年調査に比べて増加に転じ、CABG単独施行例は約17,500例であった。この内、左主幹部(LMT)病変例は5,507例であり、全CABG単独施行例の31.5%を占めていた。CABGの待機手術例の30日以内の死亡率は0.6%、在院死亡は1.2%で、LMT病変例でも成績はそれぞれ0.7%、1.28%と同等であった。

一方、冠動脈インターベンション(PCI)は、未だ、本邦の全体像を網羅し、正確に実情を把握する資料を持ちえていないのが実情である。したがって、年間施術数や対象となった病変や病態の詳細、成績、合併症発生率とその詳細などは正確に把握されていない。2009年に至って日本心臓血管インターベンション学会によって実態調査(J-PCIレジストリー)が開始され2009年度報告がなされた。2009年1年間に登録されたPCI数は24,236回で、36,363の標的病変中、LMT病変は1,034(2.8%)であった。しかし、PCI施行数が年間20万にも達するといわれる本邦の実情のごく一部が明らかになり始めたに過ぎない。今回のような議論を進化させるためにも、今後も本邦での臨床例を包括しうる系統的なデータベースの構築が進むことに期待したい。

外科領域では今後、National Clinical Database(NCD)事業が本格運用され、より詳細で科学的な検討が可能となるが、侵襲的治療全体を包括するデータベースの構築が必要と思われる。

以上のような背景を踏まえて、今回の企画が、冠動脈病変に対する治療を担う心臓外科医と循環器科医が相携えて、科学的な根拠に基づき、知的で冷静な議論を通じて、DES時代のLMT病変に対する新しくより良い治療戦略を生み出してゆくことに寄与できることを願っている。